



砂漠でアートの祭典を開催するなんて、誰もが無謀だと思うだろう。だが彼らは、その過酷な環境を逆に利用して、世界でもっとも進歩的で人に優しいコミュニティをここに築いているのだ。

ソトコト想像外旅行

世界でいちばんの国。

destination

5

SPECIAL

巨大なセット？
いいえ、本物の「町」です。



どこか別の星にいるような錯覚に陥る、「バーニングマン」の世界。この壮大な砂漠で昼夜繰り広げられるクリエイティブなイベントの数々が、人々に深いインスピレーションを与える。

BURNING MAN

人はそこで、
もう一人の自分と
出会う。

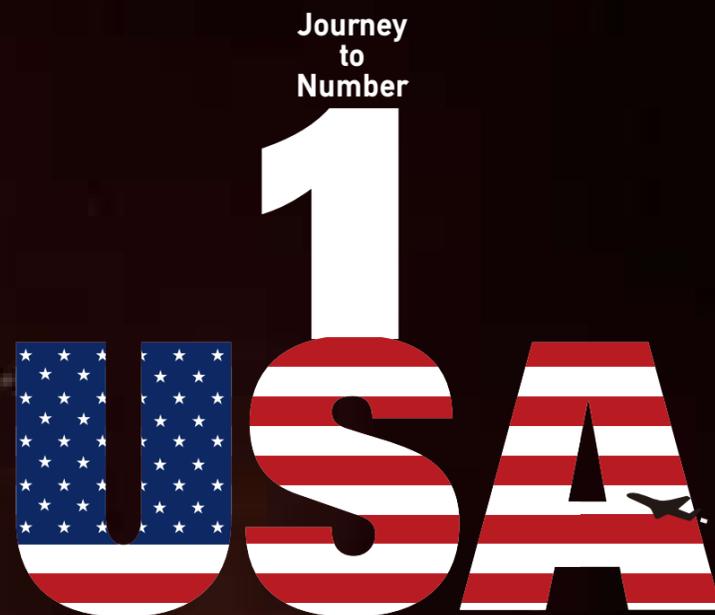
丸2日間の長旅を終えた僕は、ようやくその地にたどり着こうとしていた。炎天下の砂漠の中、空調の壊れたバスの中で数時間待たされながらも、僕は笑顔だった。車の行列の先には「バーニングマン」の会場となる「ブラックロック・シテイ」があったからだ。そこは、ネバダ州のブラックロック砂漠。アメリカでもっとも過酷な環境の一つだ。便利な都会とは対極にあるこの地で、6万人が1週間を過ごすことになる。一体どうなるのか、まったく想像がつかなかった。専用の「サバイバル・ガイド」が参加者の必読書として配られるイベントなのだから、かなりの「冒険」であることは確かだった。心の準備はできていた。

バーニングマンへの参加を決めた後、それがどんなイベントなのかを人に説明するのに苦労した。大規模なアートの祭典、「資本主義を排除した実験的コミュニティ」、「砂漠に突如現れ、1週間後に跡形もなく消える町」、「昼夜を通じたダンス・パーティー」……。実際はそのすべてであり、それ以上なのだ。そこで1週間を過ごし終えた今でも、説明は難しい。ただ言えるのは、すべての参加者は「より良い社会」を垣間見るためにそこに集まるということ、そしてそれが現代のアメリカ社会をむしばむ様々な病的要素の解毒剤になるということだ。

ブラックロック・シテイでは、誰もが「市民」だ。そこに「観光客」は存在しない。全員で一つのコミュニティを形成するのだ。砂漠の過酷な環境も、人々の結束を固める要素の一つだ。暑さや乾燥、頻繁に襲ってくる砂嵐との闘いを余儀なくされる状況が、互いの絆を強める。また、そこではあらゆる商業的要素が排除される。消費社会から隔絶された、実験的な理想都市なのだ。

上下水道も電気も通らないこの町は、世界中のクリエイティブな人々のメッカだ。数平方キロに及ぶエリアでは、アート・イベントやダンス・パーティー、ヨガ教室、ゲーム大会、各種フォーラムなどが常時開催されている。そして、参加者が最も充実感を得られるのは、何かを人と「分かち合う」という行為だ。ボランティアとして町の運営を支援すること、見知らぬ人々に施しをして回ることなど、様々な活動に共通する「分かち合いの精神」こそが、バーニングマンを外界と隔て、毎年多くの人々を引き寄せているのだ。発起人の一人、ラリー・ハーヴィーさんの言葉を借りるならば「人々はパーティーのためにここに集まり、コミュニティのために留まる」のだ。開始以来26年間、拡大し続けているという事実が、この言葉に重みを与えている。

「バーニングマン」という名称の由来にもなっている、高さ30メートルの人型像を燃やす儀式がこのイベントのクライマックスだ。それが何を象徴するかは、見る者によって様々だ。



United States of America

世界一、より良い 社会へのムーブメントを生む国 アメリカ。

毎年夏が終わる頃、アメリカの砂漠に、ある実験的なコミュニティが出現する。人々はそので1週間過ごし、アートを中心とする様々なイベントや活動を通して、人と人のつながりや、すべてを受け入れる寛容性の尊さを実感する。主催者らが仲間内で始めたこのイベントは、今や数万人規模の一大ムーブメントとなり、世界をより良い方向に導こうとしている。

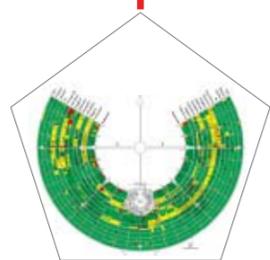
photographs by Yoshihiro Koitani text by Steve Jarvis translation by Junsuke Tokano



SCALE !!

会場の規模

ブラックロック砂漠は、ネバダ州北部の高地に広がる2万5000平方キロの荒涼とした大地だ。中でも最も過酷なのは、氷河期までは湖であった500平方キロの平野、「プラーヤ」だ。プラーヤは「浜辺」を意味するスペイン語で、その名の通り小麦粉のような粒子の細かい砂で覆われている。山間を風が吹き抜けると、あっという間に視界が真っ白になってしまう。無論、動植物は一切寄せ付けない。毎年8月の最終週、このプラーヤの10平方キロのエリアが「巨大なキャンパス」となる。そこに描かれるのは「バーニングマン」という名の創造に満ちた世界だ。



町は時計の盤面として設計され、大通りが1時間の間隔で中心から延びている。円弧状の道路にもそれぞれ名前がつけられ、容易に位置が特定できるしくみになっている。

The 10 Principles of Burning Man

バーニングマンの10大原則

1

社会の一員としての責任

各種イベントの企画者は、公益性と安全性に配慮することが求められる。また、すべての参加者が自らの行動に責任を持たなければならない。バーニングマンは国の土地で開催されるため、すべての法に従うことも必須だ。他の町と同様、事故などの問題は皆無ではないが、アメリカ全般に比べると、かなり安全なコミュニティだ。

2

自立の徹底

ブラックロック・シティは、便利で当たり前の消費社会からは完全に隔離されている。参加者は、水や食料を含め、そこで1週間暮らすために必要なすべての物資を持参しなければならない。この過酷な条件のおかげで、参加者は今まで気づかなかった自分の力を発見し、それ駆使して様々な問題を解決できるようになるのだ。

3

跡を残さない

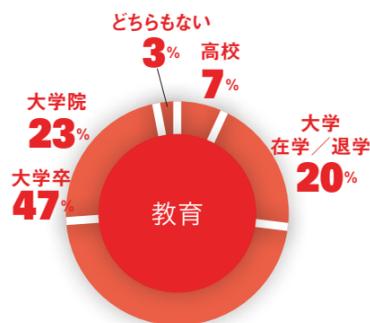
バーニングマンの参加者は、環境を重んじ、どこにも跡を残さず、後片付けを徹底し、前よりきれいな場所にして去るよう最善を尽くすことが求められる。また、すべてのものを持ち帰らなければならない。ブラックロック・シティは、開催終了の2週間後には、元の何もない砂漠に戻る。そこに町があった形跡さえ残らないのだ。

BURNING MAN?

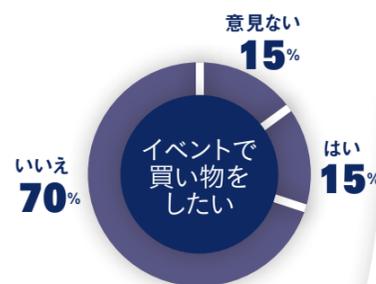
「バーニングマン」の歴史

バーニングマンの歴史は1986年にさかのぼる。サンフランシスコの海岸に集まった仲間たちが、高さ2.5メートルの木製の人型像に火を放ち、夏至を祝ったのが始まりだ。これが毎年恒例となり、年々像は巨大化し、参加者も増えていった。ところが1990年、人型像に火をつける儀式が当局に禁じられてしまう。その12メートルの人型像は同年の「レイバー・デー（労働者の日）」の週末にネバダ州のブラックロック砂漠に運ばれ、以来同地が会場となった。法さえ守れば何でもありの自由な「町」の噂は口コミで広まり、やがて参加者は数千人規模に達する。1996年、自動車事故が多発したため、自動車と銃が禁じられた。町は区画整理され、通りに名前がつけられ、住所制度も導入された。2000年代に入ると、大規模なパフォーマンスなど様々なイベントが開催され、参加者は2万人を超えるようになった。その後も拡大を続け、2012年の参加者は6万人を超えた。つまりブラックロック・シティは、ネバダ州内で上位にランクされる大都市なのだ。参加者の半数近くは「テーマキャンプ」と呼ばれる、登録された様々なイベント会場の関係者たちだ。アートやエンターテインメントをテーマにしたテーマキャンプがあれば、食べ物やその他の支援を提供するものもある。当初より、バーニングマンは運営の大部分をボランティアに委ねている。イベントの規模の拡大と内容の進化に伴い、その人数や作業の種類も増え続けている。

砂漠に出現するブラックロック・シティは、粉れもなく一つの「町」である。主催者側はそれを設計し、トイレを数か所設置するが、町づくりの主役となるのはあくまで数万人に及ぶ参加者だ。



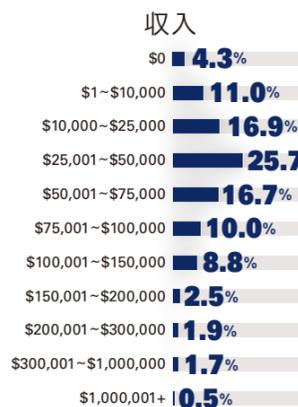
作品の質を考えると、高学歴なものが多い。



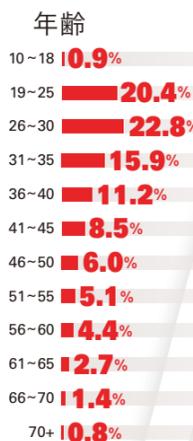
すべてを持参するから、お店は不要だ。



コスチュームのせいで、性別不詳な人も多い。



参加中にお金は不要だが、前後の出費は大きいのだ。



高年齢層の参加者には、数十年の経験者が多い。

Burning Man 参加者人数
「ゆくゆくは10万人突破」というのが大方の予測だ。

20人 1986年

300人 1989年

600人 1992年

4000人 1995年

15000人 1998年

26000人 2001年

35000人 2004年

47000人 2007年

51000人 2010年

60000人 2012年



United States of America

BURNING MAN

規模も「やっぱりアメリカ」だ。

Interesting Facts

バーニングマンの意外な事実 10選

- 町では無料の新聞が配られ、ラジオ局も開設される。
- 緊急車輛やオブジェとして許可された車以外は運転禁止だ。
- 主催者は、簡易トイレを会場内の1000か所以上に設置。
- 外部との通信手段は、ほぼゼロ。携帯もネットも使えない。
- 救急医療や警備チーム、郵便局、そして空港も完備。
- 食品保存用の氷とコーヒー以外は、何も売っていない。
- 主催するのは、たった30人の団体。主役はボランティアだ。
- 太陽光発電装置を設置し、近隣の町にも無料で電力を提供。
- 初参加者には、砂の上を駆け回り、鐘を鳴らす儀式が。
- 町の人口は、ネバダ州で第3位になったこともある。

自己表現の徹底追求
 パーニングマンの参加者は、自分にしかない「何か」を表現し、人々と分かち合う。その「何か」を決めるのは表現する本人だが、他人に危険をもたらす行為、環境を破壊する行為は許されない。それさえ守ってれば、一般社会の基準や制約から解放され、拒絶や嘲笑を恐れることなく、深い自己探究と自己表現を行えるのだ。

わざわざ休暇を取り、外部と連絡さえ簡単に取れない遠い砂漠に出向き、過酷な環境の中で1週間も過ごす。こんな話を聞いて「楽しそうだし」と思う人はあまりいないだろう。しかも、390ドルの参加費を払った上で、食べ物や宿泊りに必要なもの全てを持参しなければならないのだ。プラーヤでの「自由」にどんなに強い興味を抱いていても、あまり現実的な話ではないだろう。事実、パーニングマンに参加するのは、会場の自然環境の厳しさと、「何でもあり」という方針を理解し、他の参加者の「自己表現の徹底追求」を受け入れる柔軟性と寛容性を備えている人たちがばかりだ。裸でうろつく人々、耳障りな歌声、一日中響くクラブ・ミュージックの重低音を受け入れる

覚悟がない人間や、あえて時間を作ってまで新しい経験をしようという懐の深さがない人間は、自動的に除外される。

パーニングマンでは、奇抜なコスチュームやアート作品で「内なる自己」を解放する参加者が多いが、それが必須というわけではない。太陽と砂の前ではすべての人間が平等であり、人々は「何をするか」「人とどう関わるか」で評価される。普段通りの服装でも、「自己」を他者と分かち合い、他者を受け入れ、コミュニティに参加する意志があれば、誰でも「パーナー」（参加者は皆こう呼ばれる）になれる。そして、ここで1週間を過ごし、通常の生活に戻った人々は、以前とは違った物の見方を



常連の日本人参加者、「ハダカのジュン」は移動カラオケで人々を楽しませた。

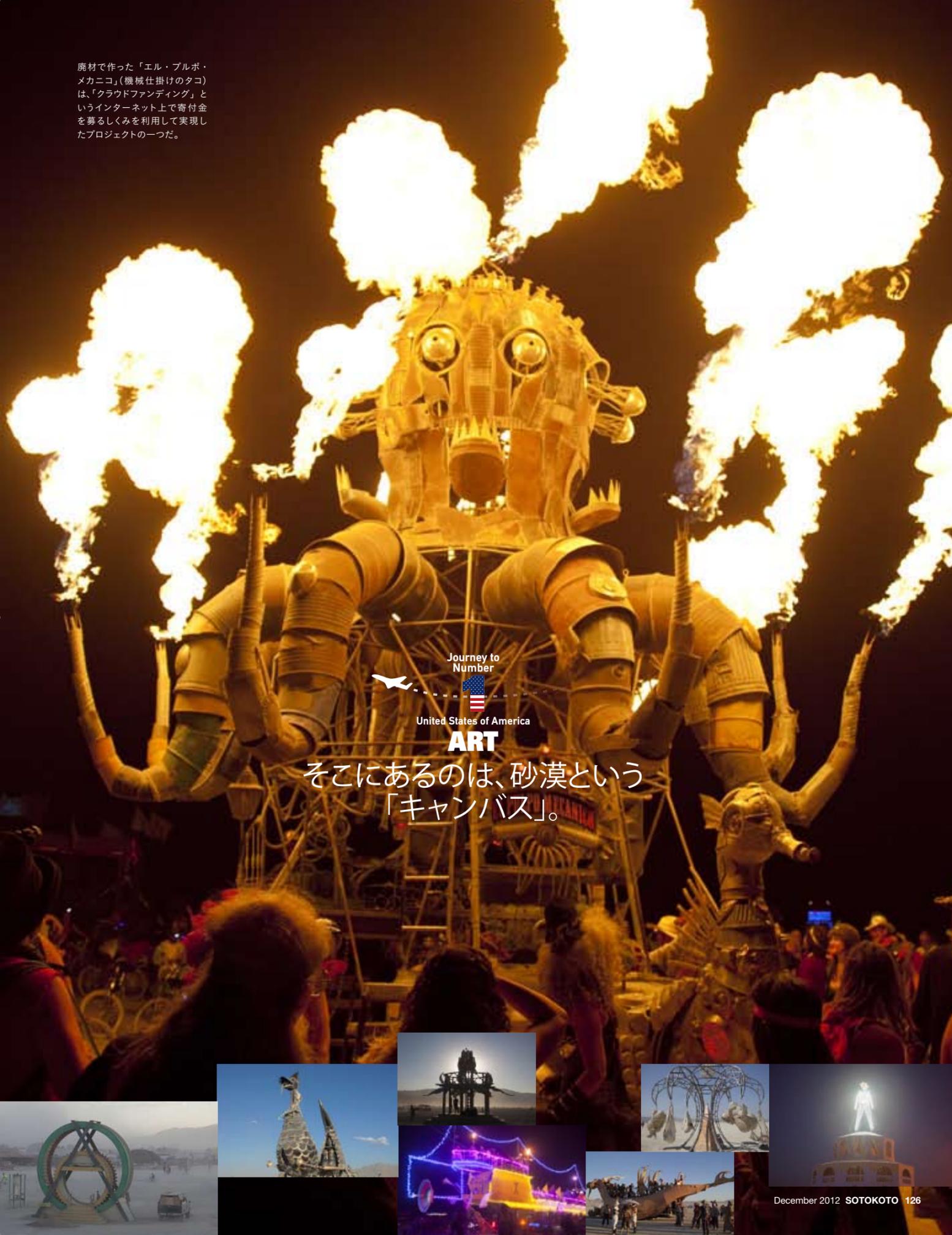
来る者は拒まず
 パーニングマンは、すべての人間が無条件で参加できるコミュニティだ。パーやオールナイトのダンスパーティーなどの大人向けの企画も多いが、家族専用の「ファミリーゾーン」も設けられ、子どもたちのために様々なイベントが開催される。また、各イベント会場は高齢者や身体障害者にもアクセスしやすいよう配慮されている。

ドレスコードは、「自己主張すること」。

パーニングマンのファッションに、「常識」や「逸脱」という概念は存在しない。自分の想像力がすべてなのだ。日中、多くは最小限の衣類しか（または何も）身につけず、解放的な雰囲気を楽しむ。陽が落ちてパーティーが始まると、思い思いのコスチュームに身を包む。そして自己主張すると同時に、寒さから身を守るのだ。しかし、コスチュームは二次的要素でしかない。参加して、ムーブメントの一部になることに最大の意義があるのだ。



廃材で作った「エル・ブルボ・メカニコ」(機械仕掛けのタコ)は、「クラウドファンディング」というインターネット上で寄付金を募るしくみを利用して実現したプロジェクトの一つだ。

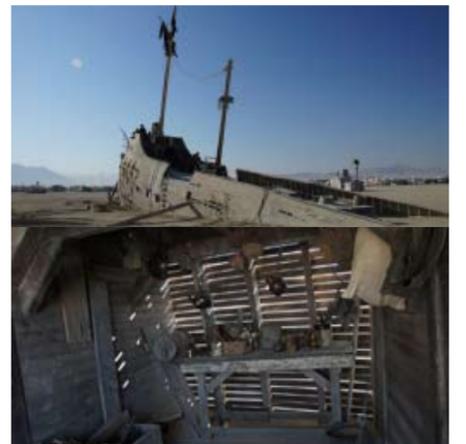


Journey to Number
United States of America
ART

そこにあるのは、砂漠という「キャンバス」。

バーニングマンは、自由と創造性の祭典である。人々にエネルギーを与え、経験の共有を促し、人間存在の意味を定義する場である。また、世界最大規模のアート・スペースでもある。何よりユニークなのは、参加者自らが企画・制作を行う点だ。主催者側は毎年のテーマを決めるが(2012年のテーマは「Fertility 20」)Fertilityは「産み出す力」、作品の内容に関する指示や注文は一切しない。価値あるアートと、そうでないものの区別さえしない。どんな自己表現もアートとして受け入れられ、参加者は望む通りに表現し、創造できる。発起人の一人であるラリー・ハーヴィーさんいわく、この

「自由」こそが、嚴重に管理された「消費社会」が衰退に追い込んだ「文化」の核心的要素であり、バーニングマンの成功に最も大きく貢献している要素の一つでもあるのだ。バーニングマンではインタラクティブなアートが重視される。鑑賞者は作品を受動的に「消費」するのではなく、作品に「参加」するのである。アートはコミュニティの潤滑油となり、絆を強めてくれる。バーニングマンは「人々と動的なつながりを持つ社会のモデルを作る」ための社会実験である。そして、受動的な消費社会への強力なアンチテーゼとして、目頭抑えつけられている「文化を創造する力」を解放する場を提供しているのだ。



展示されるアート作品は、すべてコミュニティに捧げられる「ギフト」だ。妥協の一切ない入念な作品の数々には、アーティストたちの「ただ人々を喜ばせたい」というビュアな思いが強く込められている。

「競争」という要素があるとしたら、それはコミュニティへの「より価値の高い貢献」を目指す競争である。バーニングマンの真骨頂である「創造性」を高度な次元へと昇華させ続ける、ポジティブな競争だ。創造という名の貢献は、様々な形でなされている。もっともクリエイティブなプロジェクトの多くは、町の中心から数キロ離れたプラヤーの深部で行われる。移動型の作品や、裏通りでひっそりと展開されるものもある。活動はもろろん自発的に行

われるが、その資金も、少数の例外を除き、全額自己負担だ。すべてはコミュニティに捧げられ、人々に無償で提供され、それがコミュニティへの愛情と献身の証となるのだ。そしてそれは、バーニングマンの10大原則の一つである「贈与」を実践する手段でもある。ここでいう「贈与」とは「与えられるから」贈る側、受ける側の双方に喜びをもたらすから」という理由で、見知らぬ人々に自分が持っているものを与える行為なのだ。



美しい作品、巨大な作品、精巧な作品が出揃うプラヤーでは、「参加できる」作品であることが重要だ。そこには、よれる、叩いて首を出せる、または中に入れる作品もある。「ウォール街の炎上」(左下)のように、「人々の共感を呼ぶ」という要素も評価される。

6

協力と協働

バーニングマンでは、参加者同士の協力・協働が重視される。町づくりや町の運営に不可欠だからだ。彼らは、互いのネットワーク、共有スペース、アート作品、コミュニケーション手段などを共に築き、発展させ、守ってゆく。そうすることで、人とのつながりや、人のために何かをすることの大切さを実感できるのだ。

7

贈与

バーニングマンが重視する「贈与」とは、無条件で人に何かを捧げる行為である。物々交換でもなければ、お返しを期待する行為でもない。「人を喜ばせた」という満足感が、その見返りだ。この「贈与経済」では、金銭的利益ではなく、人に与えた喜びの大きさや、どれだけ多くの人々に喜びを与えたかが、成功の尺度となる。





寺院はバーニングマンの中核であり、参加者の心の拠り所だ。静寂に浸ったり、亡き家族の写真を掲げたり、メッセージを残したりと、様々な目的で絶えず人々がここを訪れる。写真やメッセージは、最終日に寺院とともに燃やされる。



自己の内面と向き合うことにもなるのだ。ここ数十年、アメリカでは宗教離れが進んでいる。宗教は、アメリカ人のアイデンティティ、そしてアメリカ社会そのものを支える根本的要素の一つだ。それに背を向ける人々が増えることで、アイデンティティを共有し、一体感を強める機会が失われつつある。だが実際は、誰もがそうした機会を強く望んでいる



上/共有スペースは様々な人々が出会う絶好の場所だ。下/ボランティアとして町の運営に協力するの、ネットワークを広げる手段だ。作業の種類は山ほどある。

バーニングマンの「来る者は拒まず」という原則は、「来る者は分け隔てず」というもう一つの原則を含んでいる。そこでは、あらゆる階層の人々が突如として同じ世界に放り込まれる。通常は関わり合うことのない

9
商業的要素の排除
「贈与」の精神を原則とするバーニングマンのコミュニティは、スポンサーシップ、取引、広告活動が一切機能しない社会環境を目指している。ブラックロック・シティでは、いかなる商行為も許されない。また、外部の世界でバーニングマンの映像や画像などを商品化すること、営利目的で使用することも、固く禁じられている。

8
参加せよ
バーニングマンでは、何事にも積極的に参加することが重要だ。イベントや町の運営など、その対象は様々だ。個人の変革も、社会の変革も、人が何かに深く関与することで初めて可能になる。そして、それがバーニングマンの世界を創り出し、「文化の創造・再創造」という社会的プロセスを生み出す場として機能させるのだ。

人々同士が、様々な経験を共有する。そうすることで、社会的地位やルーツ、それらに伴う役割やイメージを超越した絆が生まれるのだ。そしてここでは、一般社会では考えられないほど「誰もが平等」なのだ。バーニングマンがもたらす根本的な変化は、人間関係にとどまらない。このコミュニティに参加する者は、日頃抱えていた不安や孤独感など、



200人以上のボランティアが大通りを行進しながら街灯を灯してゆく儀式も毎夕行われる。

Journey to Number
United States of America
COMMUNITY

「寺院」はすべての者を受け入れる。
どう関わるかに、決まりはない。





バーニングマンは、寺院を燃やすことでその幕を閉じる。それは、人型像を燃やす儀式の熱狂的な雰囲気とは対照的に、厳粛に行われる。人々は、炎に包まれる寺院を見つめながら、自己の内面と対話する。それは過去との決別であり、新たな生き方を模索する過程でもあるのだ。

幕引きは「破壊」であり、「再生」でもある。

BURNING JAPAN



主催団体である「バーニングマン・オーガニゼーション」は、その趣旨に賛同する他団体の支援も行っている。今年10月中旬、日本初の同団体公認イベント、「Burning Japan」が山梨県の玉川キャンプ村で開催された。様々なコスチュームを身にまとった300人以上の参加者が夜通しダンスを楽しみ、フィナーレでは日本版の「人型像」に火が放たれた。www.burninja.info

バーニングマンをここまで拡大させたのは、人々が抱く「理想的な社会を築きたい」という願望だ。アメリカでは、社会に重くのしかかる経済危機などの問題とは無縁なコミュニティが求められている。バーニングマンには、社会から消えつつある「自由」と「人とのつながり」がある。そして、アメリカ人の原風景である「西部の荒野」に身を置く貴重な機会でもあるのだ。その巨大かつ予測不可能、刺激のかつ冒険的なムーブメントの一部となることは、テレビやパソコンを通して仮想現実を味わうこととはまったく次元の違う、魅惑的な経験だ。それは人々を創造的



寺院では、人々の心が裸になる。辛い現実と向き合い、それを受け入れる場所なのだ。

行動へと駆り立て、すべてを受け入れさせる。そうして得られる充実感が、コミュニティをより強固にするのだ。このコミュニティの大きな特徴は「与えれば与えるほど多くのものが返ってくる」という事実だ。市場の原理を完全に否定するバーニングマン

は、多くの人々を引き込み、広まり続けている。バーナーたちは、プレーヤで得たものを様々な形で日常生活に反映させる。それは、ハリケーンの「カトリーナ」がアメリカを襲った際に結成された災害支援団体「バーナーズ・ウィズアウト・ボーダーズ(国境なきバーナーたち)」のように、実体のあるものとしても現れている。だが、バーニングマンの存在意義をもっとも顕著に表しているのは、今やそれが世界各地で開催され、アメリカ各州と世界20か国(日本を含む)にそれぞれ支援団体があるという事実だ。バーニングマンにはオーストラリ



このオブジェも、最終的には燃やされる。人のEGO(エゴ)のはかなさの象徴だ。



「自分が何を望むのか」を知るために、人々はここを訪れる。

ア人も多く参加していた。アメリカ社会のネガティブな要素を数多く取り入れてしまった祖国の現状を考えると、当然に思えた。だが、そこには僕の第二の祖国である「日本」を彷彿させる要素もあった。たとえば礼儀、正直さ、隣人への敬意、そして環境を守る責任感。日本では当然のことだ。「自由」という要素も、この国と共通している。東京でも奇抜なファッションはよく見かける。また、「コスプレ文化」も日本の自由の象徴だ。この国ではバーニングマンのようなイベントはアメリカほど強く必要とされないかもしれないが、開催する意義は確かにある。上下関係や「内と外」の境界線を超越した人とのつながりや、見返りを求めず施し、お返しを気にせず施される喜びは、社会をより良い方向に導くだろう。そこそそが僕の望むコミュニティである。そこに「パーティ」という楽しみが加われば、僕はもう何もいらぬ。

10

直に経験せよ

一般社会では、何かを介在した経験があまりに多い。人々はテレビに映し出された世界を現実として認識し、ものを消費することで自己表現する。バーニングマンでは、すべてをその場で直に経験するのが鉄則だ。周囲に直接働きかけ、コミュニティに参加しながら自己の内面を表現することで、自身自身の現実を創り出すのだ。

